

第1回キャンパスおだわら運営委員会 会議概要

日 時	平成27年5月13日（水）午後2時から4時まで		
場 所	小田原市役所 議会全員協議会室		
委員長	齊藤 ゆか	出席	学識経験者
副委員長	瀬戸 充	出席	生涯学習の向上に資する活動を行う者
委員	金澤 久美子	欠席	学識経験者
	左京 泰明	出席	
	有賀 かおる	出席	生涯学習の向上に資する活動を行う者
	安藤 恵	出席	
	岩屋 泰彦	出席	
	与那嶺 信重	出席	
	石井 悦子	出席	公募市民
	永田 圭志	出席	
	立花 ますみ	出席	教育委員会が必要と認める者
事務局	(文化部) 諸星部長、安藤副部長 (生涯学習課) 友部課長、大木担当副課長、高橋係長、 相澤主査、佐久間主任		
キャンパスおだわら事務局	奥村NPO法人小田原市生涯学習推進員の会理事長 福島NPO法人小田原市生涯学習推進員の会理事		
キャンパスおだわら人材バンク実行委員会	太田委員長		
傍聴者	なし		

※委員は選出区分別五十音順(委員長・副委員長除く)

## 1. 開会

安藤副部長より、卓上配布資料について説明。人事異動による職員紹介。

## 2. 議題

### (1)開設講座について

委員長 本日で2期目のキャンパスおだわら運営委員会は最後になる。今日で、2期目で12回目ということで、12回、皆さんと顔を合わせていることになる。そこでいかなる成果が出たのかといったことの確認が今日は中心になると思う。確認したうえで次の3期目にどのようなつないで、重点的に議論していくのかという展開になっていくかと思うので、ご協力をお願いする。それでは議題の(1)開設講座について、資料1の説明をお願いする。

キャンパスおだわら事務局（以下、「C事務局」）

資料1に基づいて説明させていただく。

こちらは、前回第6回の運営委員会以降に申請されたもので、一部開講済みの講座も含め、主に4月からの講座で、106講座が該当する。今回は今年度、人材バンク実行委員会主催で、6月から9月に開催予定のキャンパス講師による全35講座が33%になっている。資料について従来と同じだが、資料の右端にジャンル別、開催月順に掲載させていただいている。ジャンルについては全体で7分野、上から音楽・演劇、文学・歴史、語学・国際交流、美術・手工芸。続いてスポーツ・アウトドアが24講座で23%を占め、福祉活動・社会活動。さらにその他が36%となっている。なお、その他については、趣味・実用、娯楽・ゲームに加えて、情報処理・通信、自然科学等々も含まれており、多数になっている。

欄外に表示しているが、講座の先頭についている【お】および【子】は、【お】は小田原ならではの講座、【子】は子どもが参加できる講座32講座、全体の30%となっている。

説明は以上である。

これらの講座は、事務局で仮認定した講座であり、もう一度委員の皆様にご確認いただきたい。

委員長 すでに始まっている講座もあるが、質問などをお願いしたい。

有賀委員 ジャンルのところだが、今回その他のジャンルが多いので確認したい。例えばNo.81「磯の生物を観察しよう」は野外学習で、キャンパスおだわら情報

誌で確認するとアウトドアになっている。5月号の8ページである。また、No.95の「アベノミクスで大丈夫？」は、その他ではなく福祉活動・社会活動になっている。今日の資料でも、その他の区分は幅広いというのはわかったが、基準の確認をお願いしたいのだが。

委員長 領域区分について、その基準がどうかということだが、如何か。

C事務局 指摘いただいた内容について、No.81については、これは主催団体が郷土文化館である。内容的に、アウトドアという側面もあるが、その辺りの定義ができていなかった。申し訳ないが、訂正していただきたい。No.95は、その他の範囲が広範囲に渡っており、今回はその他で紹介させていただいた。

委員長 領域がいくつかに分かれているが、この領域の中で、今期はまだ分からないと思うが、どのあたりの領域が、一番応募した時に人が来る講座になるのか。

C事務局 席上配布させていただいた資料があるが、どのジャンル、どの領域が、一番人気があるのかということについては、時期性もあるが、特に小田原の特性から見ると、文学関係、小田原再発見というところが人気を集めている。また、例外的な話をすると、その他のジャンルに掲載しているが、県立の生命の星地球博物館主催の講座が年間80講座くらいある。

委員長 後程、この資料については説明していただくことになっている。ただ、やはり、その他のジャンルに分類される講座が多い。有賀委員がご指摘くださったように、その他という内容が多く、判断基準が難しくなっているという側面があるのではないか。開設講座について、ほかにいかがか。

(質疑なし)

委員長 では、この開設講座については、承認でよろしいか。

(異議なし)

委員長 では、承認で進めさせていただく。講座の内容に関しては、後程の議論の中に入ってくるので、よろしく願います。

## (2) キャンパスおだわらの平成26年度実績について

委員長 では次の議題で、キャンパスおだわらの平成26年度の実績について、事務

局から報告をお願いします。

友部課長

それでは、議題「(2) キャンパスおだわらの平成 26 年度実績について」説明する。

資料 2 をご覧いただきたい。

これは、昨年度の第 3 回運営委員会で提示した、キャンパスおだわらの事業ごとの指標と平成 25 年度の実績値を記載した表に、平成 26 年度の実績値を加えたものである。この表に基づき、実績値に大きく変化の生じたところを中心に、キャンパスおだわらの平成 26 年度の実績について説明する。

表の事業名の列で一番上にある「学習講座」であるが、「講座定員充足率」が 5%ほど増加している。ここでいう「講座定員充足率」は、行政講座を除いた講座を対象としており、現在は人材バンク実行委員会が企画する講座の定員充足率を把握している。増加の要因としては、「連続講座」などの定員充足率は前年度と比較してほぼ横ばいであるが、小・中学生の夏休みの宿題のニーズに応えるため、「夏休み子どもおもしろ学校」の開催時期を見直した結果、定員充足率が増加したことが主な要因である。

次に、「開催講座ジャンル数」については、指標の設定時には把握しておらず、平成 25 年度の実績値は「調整中」としていたが、平成 27 年 4 月からの講座について、詳細ジャンルを把握していくこととした。

次に、「講座開催団体数」が約 40 団体増加している。これは、認定講座などを実施した市民団体や企業、教育機関等の把握が前年度に比べて進んだことが要因である。

次に、「連携講座数」は平成 25 年度に比べ平成 26 年度の講座数が大きく増加した。これは、平成 25 年度の実績が 9 月からの数値であることに加え、平成 26 年度において、連携講座数を指標に項目として定めたことで、NPO 法人小田原市生涯学習推進員の会を中心に、意識的に把握に努めていただいた結果である。

次に、「出前講座のメニュー注文充足率」であるが、8%ほど低下している。この原因としては、平成 25 年度に比べ、平成 26 年度の出前講座の申込総数は大きく変化しておらず、「認知症を知る講座」や「消費生活講座」といった特定の講座に申込が集中したためである。

次に、「人材バンク」であるが、「人材バンク自主講座開催数」については、キャンパス講師に対して実績報告の呼びかけをするなどしたことにより増加している。しかしながら、実績の報告がないキャンパス講師の状況把握など、人材バンク再検討会議の中でも意見が出されている、個々の講師の実態及び意識把握は、課題であると認識している。

次に、「学習情報」であるが、PLANET かながわの「ホームページアクセス数」が増加している。こちらについては、神奈川県が管理運営しているが、キャ

ンパスおだわらとして、PLANET かながわへの講座情報掲載のスピードを前年度より早めたため、講座情報の掲載期間が増え、結果としてアクセス数増加に繋がったと考えられる。

次に、「学習相談」であるが、「相談者満足度」については、指標の設定時には把握していなかったが、平成27年4月から、相談者に対して簡単なアンケート用紙をお渡しし、満足度を把握することとした。

次に、「運営関係」であるが、「年代別参画者率」については、NPO法人小田原市生涯学習推進員の会及び人材バンク実行委員会ともに、70代以上の割合が増加している。

次に、「参画者満足度」については、指標の設定時には把握していなかったが、平成27年度中にそれぞれの団体にアンケートを実施する予定である。

最後に、「フェスティバル等」であるが、「サークル活動による施設利用数」については減少している。この理由としては、駐車場が減少するなど、市役所の耐震補強工事が影響していると思われる。

以上が資料2についての説明である。

なお、参考資料1-1は、キャンパスおだわらの各事業の実績を年度ごとに比較した表である。また、参考資料1-2から1-6については、各事業の平成26年度実績を記載したものである。

以上で、キャンパスおだわらの平成26年度実績について報告を終わらせていただく。よろしくお願いいたします。

委員長 参考資料1-1について、何か特色のある部分についての説明をお願いします。

大木副課長 学習講座の中にある市民企画講座だが、総じて、講座数から参加者数まで増えている。これは、キャンパスおだわらの事務局を中心として情報の把握が進んでいることが要因である。行政講座については総じて変化がないが、こちらの民間の部分の把握が進んでいるということが大きな特徴かと思う。また、原因の分析は進んでいないが、学習相談についてだが、25年度から26年度にかけて、件数が落ちている。一概に件数が落ちたことが悪いというわけではないが、これが顕著となっている。それから人材バンクだが、キャンパス講師の登録数については、微増ながら増えている。ざっとではあるが、以上が特徴である。

委員長 平成26年度の実績が中心となっているが、資料1-1にあるように、平成22年から26年にかけて5年間、どのように実施され、変化・発展してきたのか、あるいはどこに課題があったのかというようなことを、データの数で示したものになる。少し読んでいただいて、問題点や課題、逆にどういった点が達成できているのか、といったところを見ていただきたい。2、

3分見ていただきたい。

(2、3分経過)

それでは、追加資料の説明をいただけるということだったので、キャンパスおだわらの学習講座について、追加で出された資料について説明をお願いする。

C事務局

この資料は席上配布させていただいたものだが、キャンパスおだわら学習講座の関係でいろいろ企画して進めてきた。この関連で講座をジャンル別に分類して、整理、提供していくということがある。席上配布した資料は、市民講座を中心にジャンル別に分類、整理したものである。この表自体は縦方向に講座、市民講座、企業講座、横方向に講座ジャンルを展開、整理したものである。この資料の数値については、現在最終的な集計を行っているところであり、暫定的なものとなっている。内容についてご案内させていただくと、資料の右の部分に、解説をさせていただいている。

まず、市民講座の一つ目、キャンパス講師講座については、資料にあるような状況になっている。ジャンルについては多岐に渡っているが、音楽・演劇や美術・工芸を中心に市民関係と子ども関連のミニ講座が約半数の状況で、本件の関連の講座は現状維持という状況である。

それから市民講座、企業講座について、これは一般講座と企業・団体が行った企画講座が含まれている。これについては、件数も年々増えている。これは講座の把握率が上がったことが理由であるが、個人・団体サークルおよび企業企画講座を合わせると、順次拡大中である。個別には特徴のある自主的な講座が提供されつつあり、キャンパスおだわら学習講座として、ここが一番大きいウェートを占めていると認識している。具体的には、先ほどご指摘いただいた国際、文化・教養講座などである。同じような見方をさせていただいて、3段目、これは大学機関、教育機関関係で、市内にある3つの大学、教育機関が提供する講座である。残念ながら年間で13講座ということで、私どもの努力不足もあるが、キャンパスおだわらとしてレベルの高い講座を期待していきたい。今後、積極的に働きかけをし、増やしていきたい。

ジャンルに渡ってみると、全体としてはバランスよい状況かと思うが、地域性をみると、ビジネス系であるとか、情報系が展開されているが、こういう講座について私たちは、公募型市民企画講座、一般の市民講座を中心に発展を期待しているジャンルであり、レベルについての提案、要望を含めて取り組んでいく。このデータは一つの参考資料として確認いただきたい。

委員長

資料も多いので、3つの段階に分けて考えたいと思う。

1つ目は2期目に求められているのは評価をするということ。1期目に立ち上げたものの内容が軌道に乗ってきたから、軌道に乗ってきた内容をさらに

良くするために、2期目の役割としては評価をして、さらなる発展に関する提案をしてもらいたいというところが、2期目の我々の役割だったように思う。そういった意味でいろいろな数値が出されて、読みにくいところもあるが、評価の部分の仕方や、どういう部分が不足しているのか、どういうところが分かりにくいのかというようなところで、まず1つ目として、読んだ段階で、分からない言葉やキーワードなどもあると思うので、疑問点についてまず質問をしていただきたい。こういう点はやっていないのかといった質問でも良いと思う。

2つ目は、私たち2期目の役割の評価といったところになるので、どんな成果が今回の2期目に限らず、成果があったのかということの評価して、皆でそれぞれどういうところがすごく良かったなど、そのようなところを出していきたいと思う。

3つ目は、もう少しこういうところはさらに強化すべき点だという課題があると思うので、問題点や課題について皆さんで議論して、その上で皆さんの議論を総括した上で、重点的にこういったことが今後検討していかなければならないのではないか、というようなところを整理していきたいと思う。

では、資料をご覧になって、この部分がわからない、ここの内容についてはどうかなど、そのような質問はいかがか。

与那嶺委員 先ほどの追加資料の中でも、数値というのは1年間の、26年度の講座開設数ということによろしいか。

C事務局 その通りである。

与那嶺委員 もう一点であるが、記事と書いてある部分で、上に71、20と書いてあるがこれほどのような意味か。

C事務局 ここに記載の数値は、合計の数値になっている。

委員長 ほかにいかがか。

岩屋委員 まず、一昨年度の数値がないと、正直評価の仕様がでないのではないか。昨年からどうだったかが分からないと、それぞれ例えば市民講座でも当初目標を設けて、その結果としてどうなったかということの部分があれば評価ができると思う。例えば、キャンパス講師講座でも、自主講座というのは結局一度もなかった、当初開始した時には、それなりにここも何件かは考えていたのかなという部分がないと、良く分からない。確かにこれで言うと、そここの件数があるから良いということかもしれないが、来年以降に結び付

けようと思うと、過去からの経緯としてどうだったのかなどの分析が必要である。

例えば、今、人材バンクの再検討ということでスタートしているが、当然キャンパス講師講座のところを私が見ていくと、今の進めて行こうとしているところはどちらかというと、この自主講座を増やしていけないか、という取り組みを考えていくところが、この資料では、自主講座が全くないということになっている。果たしてこういうところの部分が、今実施している最中なので件数が把握できていないのか、それとも本当に実施されていないのか。あるいは、区分別で言うと、まったく開催されていないジャンルがあるが、その原因は何か。例えば、キャンパス講師講座で言うと、この講座の講師が全くいないということが原因で、まったく開催されなかったということなのかというような、何かないと評価と言われても、正直これだけだと難しい。

C事務局 私ら席上配布させていただいた資料だが、昨年度の市民講座を中心とした内容になっている。今、指摘があったように、キャンパス講師の自主講座については、この資料の中では反映できていない。前年度、さらに前々年度からの状況というのは、資料2および資料1-1に展開されているのでそちらでご確認いただきたい。席上配布の資料は、そういう状況であるという参考資料になる。

委員長 今の話は、自主講座が実施しているが、ここに書かれていないということか。

C事務局 そうである。自主講座は継続的に展開されている。参考資料1-1に、市民教授（キャンパス講師）自主とあるが、これは22年度から26年度まで展開されている。

委員長 市民教授というのが自主講座に該当するといったことで、資料を重点的に見ていただくのは、資料1-1、資料2ということで、あらかじめお送りしていただいた資料の方が良いかもしれない。これはあくまでも参考のイメージ図と思って見ていただくということかと思う。

岩屋委員 この形で精度の高い資料を作っていただかないと、これを一つ一つ見て自分の中でどう把握しろと言われても、これは正直な話、時間が相当ないとできないと思う。

委員長 課題も合わせて岩屋委員がおっしゃったように、あらかじめの目標設定と、達成度というところが書かれていないということだが、資料2についても目標値は28年度は設定されているが、例えば充足率は何%くらいあってほし

かったとか、そういうものはどうなのか。

それで、私に分からなかったのは、資料2のところの共通と書いているところの、上から6行目だが、連携講座とあるが、これは数が増えたという話があるが、連携講座というのは何の連携を意味しているのか。

友部課長 共催で行っている講座や、主催者が二つ以上あるものなどを連携講座と呼んでいる。

有賀委員 今の連携講座のところ、私は参考資料1-2にあるように、例えば7地域連携講座や8に連携講座とあるので、そのあたりが増えてきたのかと思っていた。

友部部長 地域連携講座というのは、連携講座の名前になっているが、地域と連携しているということで、資料2で言っている連携講座とはまた別のものである。

委員長 ほかに、有賀委員はあるか。

有賀委員 参考資料1-1になるが、私が人材バンクの再検討委員会に入っている関係で、人材バンクのところ、市民教授の数からキャンパス講師の登録数を比べると、市民教授からキャンパス講師に移行する時に、例えば24年度から25年度で130から68というように、かなり半減している。そのあたりは、例えば登録方法が変更になったとか、何か半減した理由は考えられるのか。例えば、今のキャンパス講師だと、推薦者が必要になったという話で、市民教授の時は特に登録方法にそういう制限はなかったのかとか、何かそのあたり、人数的には25年度と26年度は微妙に増えているが、24年度から25年度の入替の時期に関して見ると、半減していると思うので、確認をしたい。

委員長 その前に市民教授とキャンパス講師というのは、どう違うのか。

有賀委員 名前を変えただけではないか。24年度までは市民教授という名前で、キャンパスおだわらになってから、キャンパス講師という名称に変わった。

委員長 市民教授ということで、市民が先生になってもらうということでやっていたが、それをキャンパス講師という名称に変えたということであると理解した。

大木副課長 25年度に人材バンクのリニューアルをしたときに、市民教授からキャンパス講師に名称が変わったこと、それからその際、登録が全て変更になったの

で、今まで登録していたかたがたを改めて一から登録する形にした。さらに登録要件が変わり、まず年会費を千円とる、これが大きな点である。それから推薦制になったので、どなたかの推薦がないと受け付けられない、等があり、130から68という形に減ったということが言える。

委員長

ほかに疑問点などはないか。

それでは2つ目に入る。すべてを評価するのは難しいが、何点か皆さんなりにクローズアップしていただき、キャンパスおだわらの講座で、どういうところが秀でているのかとか、成果になっているのかとか、そういった部分の評価。合わせて、課題になりそうなところはどうか、という二つの観点から、皆で共有したいと思う。

大木副課長

少しよろしいか。この議題の中で、資料が多いのだが、本来我々が提出させていただいたのは資料2がメインとなっている。資料2の補足説明をする意味で参考資料として付けさせていただいた。資料2については、こちらの運営委員会の中で2年かけて作ってきた目標値、指標である。これをもとに26年度、1年間をやったその結果をここに提出させていただいている。参考資料から評価していただいても構わないが、もしボリュームが多くなった場合は、資料2をメインで検討いただくほうが良い。

委員長

承知した。資料2は、皆さん自身で評価するといった指標や、指標項目といったことを作ってきた経緯もあるので、その部分の内容の、ここの部分は達成されたが、ここの部分はまだ見えてこないとか、そういったところの内容でプラスアルファ、結局この数はどうなっているのかというところで、適宜参考資料を見ていただいて、議論したいと思う。資料2をご覧になっていかがか。

岩屋委員

この評価は、目標値が平成28年度末の時点で最終目標を立てている。その過程として26年度の部分の評価ということで良いか。おそらく、このままでいけば28年度には到達できるだろうというのか、あるいはもっとテコ入れをしないと、ここには到達できないのではないかという意味での今回の評価になるのか、この単年だけを評価するというのか。そこはどうか。

大木副課長

この目標設定の際、議論になったが、最終目標については、小田原市の総合計画があり、この目標が平成34年、そこを目標に仮に設定してある。それでは遠すぎるということで、総合計画の前期のサイクルが28年度ということなので、一つの目安としてこちらを短期的な目標としている。この28年度の目標にあたっては、指標はあくまで仮置きで、今キャンパスおだわらが

現状認識をするためにこれを置いたということがあり、これが果たして最終的な指標になるのかというところは、時期も含めて議論していただきたい。ある意味、全て仮置きという部分があるのだが、一つの目安として今こういう指標を使って、定めて、28年度の短期的な目標を、これは25年度の数字からいくと単純に10%アップで仮に置いている。意味があるかという、それほど無い数字である。そういったところを加味していただき、なかなか最終目標であるとか、中間の28年度の目標に向かってどうだということが見えづらいかもしれないが、26年度一年間、皆さんのご意見を取り入れながらやってきた結果がこれであるということで評価していただければと思う。

委員長

この指標を見る限り、私の意見だが、誰が講座を提供しているのかといったところの、誰がという部分の評価できる部分は、市民が提供しているとか、企業企画と書いてあるが、民間企画だと思うが、拝見すると必ずしも企業ということではなくて、法人とかNPOとか、NPOは一般的には企業とは言わないので、民間企画と言った方が良いのではないかと思う。民間企画とか、もともと生涯学習の講座だと行政企画というのが主たるものだったと思う。それに加えて民間企画とか市民企画というのが、全体としては増えているということは評価できるのではないかと思う。市民教授やキャンパス講師など、市民のかたがたの協力、連携という意味での民間企業等との連携や、教育機関、学校教育への協力という意味の連携などを進めたことから、全体として平成22年からみると、連携や市民協力ということが、全体として増えており、そのことが講座数、参加者数の増加にも繋がっているのではないかと思う。課題としては、誰が学習講座を受けているのかという、受講者の現状が見えてこないということがあるので、ここの部分はこれからの課題ではないかと思う。

瀬戸委員、市民の声としていかがか。5年間キャンパスおだわら事業を進めているわけだが、地域のかたがたの声などは聞こえてくるか。

瀬戸委員

あまり、話題になっていない。

委員長

与那嶺委員、いかがか。

与那嶺委員

私は素晴らしいと思う。私が活動している団体があるのだが、やっていることは素晴らしいが、それをどう市民が興味を持つのか、子どもたちやその親がどう興味を持つか、それが課題かと思う。講師として素晴らしいかたがたをお招きし、PRもしているが、興味を持ってもらえないという悩みがある。キャンパスおだわらも、内容的には良いと思うが、参加者数が少ないということはどういうことかと考えていたところである。

委員長 講師も頑張っている。市民も頑張っている。内容も良いのではないかと企画している側は思っている。だが、参加者数が少ないという現状があり、充足率に満たない部分も起きているということかと思う。

与那嶺委員 ニーズとの関わりもあるのかと思う。参考資料があるが、その中で講座が少ないジャンルがある。講座が少ないからどうのこうのというわけでないのだが、ジャンルによっては少ない。その少ない理由が、市民があまり参加しないからやっても駄目だという意味で少ないのか、どうなのか。講座の回数が少ないジャンルについては、どうして少ないのかという部分が疑問である。内容的には良いものがたくさんある。なぜ、参加しないのかと思う。

委員長 課題も含めて、いま話していただいた。参加者数が少ない、なかなか参加してこないといった部分と、開設講座の内容がニーズに応える内容だけで良いのかといった部分、少なくともやるべき講座があるのではないかと、といった側面も、今の話の中にあつたように思う。石井委員いかがか。

石井委員 最初の頃に言ったかと思うが、良い講座があつても平日だとなかなか年代によっては参加しづらいということがあり、だからといって、土日や祭日にやればみんな来るのかというと、子どもが小さかったりすると行事が意外に多かったり、地区の行事が多かったりして、そちらに出なければならぬ、普段仕事が忙しくて、土日くらいは外に出たくないとか、なかなかそういう方に目が行く余裕がないのかなと思う。同じ講座でも色々な曜日や時間にずらすことができれば良いと思う。そういう点をすごく感じる。自分自身、この曜日は参加しづらいというものがあるので。そういう理由でも、参加者が偏ってしまうことがあるのかもしれないと思った。

委員長 講座は多様であつて、それは評価できるし、良いことだと思う。しかし、実際にそれが参加したい側にとって要件に合わないというご意見をいただいた。合わせて、参加して欲しい年代はどのような年代と考えるか。

石井委員 やはり若い世代。今、参加しづらい世代が30歳代から40歳代の人なのかと思う。50歳代、60歳代はすでに参加されているかたは参加しているので。

委員長 参加者数の課題として、若い世代、特に30歳代、40歳代の中年世代にも、もう少し講座に関わり、参加してもらえるような方向性があつたら良いなということであつた。永田委員、いかがか。

永田委員 1-1の資料の、行政分の小計が、かなり減っているのはなぜか。26年度分がとても少なくなっているが。

大木副課長 これは、表の真ん中の空欄にある、※印のところで、行政（生涯学習課）、行政（他課）は1月末時点、というところで、まだ庁内の講座の照会が終わっていない状況である。そのため、ここは1月末の数字となっており、これを3月末まで集計した段階では、それほど大きな差は無いと思っている。集計がまだ追いついていない。

永田委員 承知した。後は、資料2の講座定員充足率が5%増加し、約50%になったということだが、講座の半分は定員に達しているということか。逆に言うと半分はそうではないとすると、それは果たしてどうなのか。

委員長 講座の定員に満たない部分に関しては、その要因といったことが分析されていないのではないかという課題があるということか。

永田委員 そうである。そうように考えた時に、その講座をどうするのかと。

委員長 実際はどうしているのか。

大木副課長 先ほどの説明でもあったように、全部の講座を本来やるべきだが、なかなかそこまで集計できない。ここでやらせていただいたのは、人材バンクの企画講座、人材バンク実行委員会がキャンパス講師を使って企画した講座、この参考資料1-4の利用状況内訳の表だが、この中の内容、連続講座（前期）、連続講座（後期）、季節講座、夏休み子どもおもしろ学校、フェスティバル、ここまでの講座を対象にした率になっている。下の二つ、自主講座については企画して定員何名ということではないので、市民とキャンパス講師で自主的に、自動的に成立した講座になるので、人材バンク実行委員会が企画して定員を定めてそれに募集をかけてどうだったかということになる。それらについて、講座の半分が定員を満たしたということになる。

委員長 どういう部分が講座として満たされる傾向にあるのか、どういう部分が実際に集まらない状況があるのか、企画している側としての声としてはどうか。

太田 キャンパス講師として100前後登録されている。今、年間通して人材バンクが行っている企画講座と称するものが、まず、前期講座、後期講座とあり、子ども向けの夏休み子どもおもしろ学校があり、3月のフェスティバルがあ

る。そうすると、前期講座というと5月から9月、後期講座は10月から2月。年間通して100人ほどの講師が参加している。全員参加しているかという、講座ではなく演奏などで活躍をしている人もいるが、講座に参加して下さるかたは、どうも半分弱の講師しか参加してこない。ほかの人はどうしているかという、今分析しなければならないということであるが、今現在は、50人前後の人達で固まってきており、年間を通して同じ講座が繰り返されている。4つのイベントで同じ講座がある。回数はいくらか違うが。やはり市民も、やれば全部が来るわけではなく、繰り返されていない、その中で目玉になる新しく変わった講座や、同じ講座でも、もっと違った題名でもできるのではないかというところが浮き彫りになっている。やはり人が集まってくるのは、夏休みであれば実験教室などであるが、そのような講座ができる先生がなかなかいない。大人向けの人が子ども向けをやるかといったら、人が集まらないことが多い。我々も手をこまねているわけではなく、新しい今にフィットした、例えばスマホ教室や夏休みの宿題をお手伝いしますという講座でなど、新しい講座をコーディネーターしていかなければならない。2年、3年と経過し、マンネリ化している。

委員長

重要な話だと思う。一つはキャンパス講師の登録があっても、登録者が必ずしも講師になっているわけではないという現状があると。登録して下さっているかたがたの中でも、結局同じ人が同じ内容をしているので、課題と言えば、マンネリ化になっていて、そのマンネリ化が実際には講座の魅力には結びついていないという側面を生み出しているという話があったように思う。実際に講座の内容として非常に人気の講座や人が集まる講座は、若い人、中でも子どもという話がある。その辺りを対象とした夏休みや実験系、体験系などが人気のある講座だろうと推測があっても、結局そこに講師が来てくれない、そこまで講師が充足されていないという現状が実際にあるということである。改善の余地はかなりあると思うが、非常に重要な現場での声ではないかと思う。

立花委員いかがか。

立花委員

資料2、実績のところをみると、講座定員充足率については、100%目標のところ52.7%だが、ほかの目標値については達成されているので、今お話にあったところで問題になっているのではないかと思う。岩屋委員が話されたように、この資料がもう少し完全な形になるとすごくわかりやすいと思う。例えば、小田原市ならではの、小田原再発見の講座であるとか、スポーツ・健康というもの、歴史についても、時代の流れのようところで確実に人が動くものだなと感じた。それこそ、ベルマーレの選手がフットサルの講座をやるという、たぶんすごく人が集まっていると思う。それこそ30

歳代の人が、私の教え子にも友達同士でフットサルをお台場までやりに行くというような話を聞くので、親子で巻き込んでやってみるとか、いろいろなアンテナを張る中で、30、40歳代の方をターゲットにし、その親子で組み込んでいくなど、このような資料をいつ出すかということだと思う。土日の予定が立たなかったり、休みたかったりすると思うが、少し先を見通してこんなものがあるということ、毎回同じレイアウトではなく、ちょっとヒットしそうな、今回はこれが目玉だというような、仕掛けなどもあるといいのかなと思う。

委員長 その講座の魅力的なターゲットを絞ってといったところの講座の出し方といったことと、情報誌の出すタイミングと内容の充実といったところで、飽きない工夫にも触れていただいた。  
岩屋委員 いかがか。

岩屋委員 まず、25年度と26年度の実績をみると、極端に大きく減ったものがないし、極端に大きく増えたものもないとすると、今のやり方でいけばこの程度のことはずっと続くのかなと思う。そう考えると、それほど悪い評価ではないのではないか。ただ、先にさらに高みを求めるとすると、今回はこれでいいとしても、先ほど皆さんから出ているように、こうした方がいい、ああした方がいいのではないかと出てくる。これをもうちょっと体系化して、課題は何か、問題は何か、この課題を解決するために必要な情報は何か、どのような情報があるのか、ということをとっていかないと、その部分がわからないというふうに、細分化して見ていく時期に来ているのではないかと考えた。今、この中でいうと、私と有賀委員とで人材バンクの再検討ということを進めている。その中でも、キャンパス講師、これを議論している中で、結局活動している人が半分。こういう人たちは、放っておいても自主講座などを開いてくれる人。この人たちにフォローはいらない。もっと増やすとしたら、残りの人たちにもっと積極的に参加をしてもらって自主講座を開いていってもらおう。そうするためにはどうしたら良いのかと言ったら、よくやってくれている以外の人たちが今どんなことを考えているのか、なぜ自主講座を開催するに至らないのか、というような部分になると、詳細に情報を集めて分析するしかないのかなと。そろそろ、27年度以降というのはこと細かに、今委員の皆さんも疑問にもたれているのだから、それぞれがそういうところに取り組んでいって、その辺りを分析して、より良い方向を探していくと27年度28年度には講座数が増えたり、参加してくれる講師の方が増えたり、というところに繋がっていくのではないかと。しかし、そうなっていったということは、26年度の総括としては評価しても良いのではないかと考えた。

委員長 現状維持の部分をどう重点化して、細分化して、新たな政策に結び付けていくのかといったところの提案があった。  
有賀委員いかがか。

有賀委員 私もキャンパスおだわら運営委員をやるまでは、キャンパスおだわら情報誌もそれほど目にする事もなかったが、多岐に渡った内容で素晴らしいと思う。参加してほしい人も、参加が少ないということは、例えば子どもを対象にしたものや親子で参加できるものとか、その辺の内容についてもう少し増やしていくと良いと思う。本当にフェスティバルなどは楽しいし、私も何度か夏休み子どもおもしろ学校などを見学したことがある。一部の親子は本当に毎回来ているような感じで楽しんでいる。その辺りをどのように情報発信していったって、皆さんで参加できるようなものを作っていくのが大切であると思う。また、資料2の運営関係で、年代別参画者率がすごく高齢化していると見受けられる。どうしても、60、70歳代が多数を占めてしまうのは仕方ないのかなと思うが、もう少し若返りを図って、若者を取り込めるような工夫ができたらと思う。ただ、女性の率は増えているのが、心強いと思う。

委員長 議題3の部分にも触れていただいた。講座の内容、充実の部分、運営のあり方の部分の運営者の内容の部分についても触れていただいた。  
左京委員いかがか。

左京委員 キャンパスおだわら事業を始めた時には、我々誰もが、現状の全貌が良く分かっていなかったというところがあり、指標を設けていき、ようやくその全貌が把握できてきたといった部分が、最初の時点からすると成果と言えるのではないかと思う。とは言え、まだ現状分析の中ですら足りていない情報があると思う。一つは、それは先ほど委員長が言われたが、参加者についての情報が足りないのではないかと思う。例えば、参加者の属性など。参加者の数でいうと、参考資料の1-1を見ると、平成26年の延べの参加者数が36,631名の方が小田原市の生涯学習事業に参加したということだと思うが、仮にその36,631名の方が1年間に2回出た、3回出た、あるいは5回出たというようなことを割っていくと、ユニークユーザーというものが出てくる。仮に、5回一人が参加したとすると、全体では36,000人だが、7,326人の人が5回ずつ参加したという計算になる。では、7,326人の人が5回参加する生涯学習事業で小田原市として充分ととらえるのか、あるいはもっとユーザーを増やしたいととらえるのか。ということなども、参加者の情報を取ることによって、見えてくることかなと思う。あるいはその世代も情報をとっていくと、仮説を立てる場合に、参加者の世

代のばらつきが運営者であるキャンパスおだわら事業運営等業務委託先の世代構成と同様だと仮に仮説を置いた場合、20歳代が4%。仮に先ほどの7,326人のユニークユーザーのうち、4%が20歳代だとすると、293人の小田原市民の20歳代の方が5回ずつ参加したと。つまり、一年間、全部の講座を見渡した時に、293人の方しか20歳代では参加していないというようなことが見えてくる。参加者の情報をより精緻にとっていくと、もう少し具体的な、全体の数字では見えてこないような現状があらわになってくるのではないかと思う。もう一つ、今の情報を経た上でだが、今ここで評価しているのは、すでに講座に参加している人、今やっていることについての指標が出ているものについて、評価をしているわけだが、大前提として、我々が見ておかなければならないのは、まだこの事業に参加していない人たちのことを見ると、そのニーズを把握して応えていくという観点も同様以上に重要であろうということである。仮に先ほどの仮説だが、一人5回ずつ参加していると、全市民の在住者に比べると、たった7,300人しかこのキャンパスおだわら事業には参加していないという。だとすると、ほとんどの市民のニーズが、生涯学習に対するニーズに応えられていない可能性もある。先ほどから、若い世代という言葉が出てきているが、もし若い世代にもっと参加してもらいたいという考えであれば、そういったかたがたの、まだ参加していないかたのニーズをどのように把握し、そこにどう応えていくのかといったところも重要な観点かと思う。その辺は、若い世代が参加したほうが良いという前提で話が進んでいるが、改めて総合計画であるとか、生涯学習政策という観点から、どのようなキャンパスおだわらのビジョンを持っていくのか、都度都度、今やっている事業とそういった計画、ビジョンとを行ったり来たりしながら、目標値を定めていけばいいのではないかと思った。

瀬戸委員

自治会だと、自治会の人たちに何をやって欲しいかということを知っても、なかなか答えてくれない。どういうことをキャンパスおだわらでやって欲しいのかと聞いても、分からないとか。キャンパスおだわら情報誌を回しても、表紙は見たが、中身は見ていないとか。何を求めているかということを知るためにもいろいろPRしているが、もっとしなければいけないのかなという感じがしている。自治会の中でも、50くらい事業をやっているが、ほとんどの事業で参加者は少ない。お茶の会をやっても、カラオケの会をやっても、絵の勉強をしても、お茶碗を作る会をやっても、歴史散策をやっても、防災センターの見学でも、なかなか参加してもらえない。自治会では参加した人が帰って来たら、良かったと近所に言ってくれと、というようなPRをお願いしているが、それでもなかなか参加者は増えず、では次はどんな事業をやるかと言ったときにもなかなかアイデアをいただけなくて、自治会の役員

でいろいろ考えているがなかなかうまくいかないというのが実情である。私はこれまでの経験から、口伝えに良かったと言ってくれというPRをお願いしているところである。

委員長

人からどんどん伝えていただく方法で人づてに、というようなことである。私からも簡単に評価をさせていただくが、全体としては市民講座や連携企画というものが増えているという指標があり、そういった意味での努力があるということが分かる。一方で、キャンパスおだわらのそもそも論ということが2期目でかなり議論になっているかと思うが、本当にキャンパスおだわら自体が講座提供型でいいのかといったことである。提供する側は参加してもらうように、市民はお客さまという感じの扱いでキャンパスおだわらをこれからずっと事業として継続していったいいのかという疑問が、私自身にはある。私の大学でもオープンカレッジというものがあるが、6千人の会員があり、その会員のかたがたも、私も委員をやっているので分かるが、7割方60、70歳代で、若い講座設定の講座にいかに来てもらえるか、その仕掛けをどうやって作るかという、同じような議論をしている。そこで言えるのは、お金を取っている。1万5千円くらい。民間講座だとお金を取って人が来るというような感じで講座設定しているわけだが、このキャンパスおだわらの場合は、お金をそれほどたくさん取るというわけではなく、実費程度で講座を安く提供しているということがあり、民間と連携してやるとはいえ、行政主導でやっている部分もあるので、行政ならではの講座とか、行政じゃないとできない講座といったことも合わせて、人が集まらないからやらないというのではなく、先ほど立花委員が言われたように、小田原ならではのとか、そういうこともすごく大事にしていかなければならないし、あえて伝えていかなければならない継承の部分もあるのではないかと思う。その辺の部分が、今後考えるうえで、私は大事なかなと思う。

### (3) キャンパスおだわらのあり方について

委員長

では、3つ目の議題に入る。キャンパスおだわらのあり方といったところで、その部分が今後の議論の内容になっていくかと思う。説明をお願いします。

友部課長

(説明)

委員長

これは皆さんで議論した内容を2期目で重点的に議論した内容と、これからにつながる部分と、両面を含めている重点改善項目ということだという認識で出している。皆さんのお手元に追加資料でこういったものをお配りしている。実は私はキャンパスおだわらの委員をやっていたということ

で、生涯教育の専門家にキャンパスおだわらでこんな良いことをやっているということと、こんな発展があるといったことを学会等で発表させていただいた。宣伝も含めてということだが、11月に発表したところ、全国の自治体からキャンパスおだわらのやっている議論した内容を早く知りたいというようなこともあり、私は研究者なので、研究として書かせていただいたのは、1月に皆さんとワークショップをやり、そこでのディスカッションやその後のアンケートにご協力いただいて、そのアンケートの内容に基づいてこの重点改善項目が決まって議論しているという、一連のプロセスについて書いたものになる。中身を読むと、くだらない会議をしてもしょうがないというような、一方的な会議をしてもしょうがないということで、どうしたらこういう公的な会議でも発展的に会議ができるのというようなことも、啓発研究という位置づけでやっている。3ページ目にあるのが、皆さんと一緒に作業をやったものになる。まずは課題設定で、どんなところが課題になっているのかとか、どんなところが現状なのかという現状分析や課題分析というものを、1月にいろんな行政サイドから情報収集や情報整理していただいて、課題を抽出して、テーマを出したといったところが第1作業だった。第1作業が議論して整理したところが、皆さんでディスカッションしたところがこれにあたる。3つ目は、その内容に基づいて、分析、検証したという、調査、研究したと、運営委員と事務局の方とそれぞれ協力してといった部分が3点目。4点目が、今改善と提案といったことで、重点項目にあたるところで、これが現在進行中ということ。表1の部分は、皆さんに協力いただいた部分で、調査とかワークショップの参加者というのが、運営委員、私たちだけではなく、行政や事務局でキャンパスおだわらの人材バンクとか、NPOとして事務局を担っている人たちみんなで協議したんだというようなことが特色として挙げられる。5ページ目の表が皆さんで議論したのが、そもそも私たちは何を議論しようとしているのかという議場の設定と、運営者、担い手不足だから運営者というのはどんな仕事が行われているのかという部分と、あと地域の担い手づくりをしようといったことだから、地域の担い手づくりをするためにはどんな戦略が必要なのか、といった部分と、ABCに分かれてテーマで議論した。その議論した内容を6ページに書かれているような表3に書かれているところが、Aの議論だけを紙面の関係でまとめた部分になる。こういった項目が挙げられたということも挙げていて、8ページ目を見ていただくと、表4だが、それぞれのテーマ、ABCで出された、ポストイットで出していただいた内容だが、どういった項目が一番多く挙げたのかという数で示したものである。ここを見ていただくと、すごく多いのがAの部分は講座の内容自体ということが、一番多いところではあるが、それ以外の調査とかニーズの把握が必要だとか、そういった部分が挙げられていた。Aの部分を見ていただくと、9ページを見ていただくと、これは皆さんに何が重

点で緊急度が高い項目かということを挙げていただいたところよると、これは調査結果だが、まずはニーズの把握をちゃんとしよう、次に情報発信のあり方を考えよう、3番目にまちづくり人材育成とかあり方をちゃんと考えていこう、4点目が行政が担うところと民間が担うところの住み分けをきちんとしていこう、あとさらに運営のあり方とか今後どうやって運営をしていくのかといったことの組織体制を考えていこう、6番目がターゲットとかセグメント、先ほどどんなターゲットに重点を置いて優先順に実施していくかということがある。こんな感じで優先順位の高い順に議論を2期目ではしてきて、ここで1番目と2番目がだいたい解消され、実際に調査票を作ったりして、これからの議論が3番目と4番目、5番目あたりがこれからの重点項目になるんだといったことがここで分かってくる。8ページ目に戻っていただくと、BとCのところを見ていただくと、すごく大事なところだが、事務局のマネジメント力を持っているとか、ファシリテーター力を育成しようといったところで、まちづくりの担い手を育成しようと言いが、どういった人材とかどういう人なのかといったことが、人材目標を具体的に決めていかなければいけないとか、どういうことを実際に講座の中にして人を育てていくのか、といったことを考えていかなければならないので、BとCは進行途中ではあるが、こんなことも皆さん2期目で1月から夏までかけて、8ヶ月間だが、8ヶ月間に行った皆さんで委員会で設定した内容の議論内容をまとめあげたといったところになるので、参考までにお配りさせていただいた。これは実はまだ公にはなっていないものなので、読みにくいと思うが、見ていただければと思う。

再度、資料3の方に戻るが、そんなところで、1、2の部分は議論としては終わった。3番が今現在進行中で、岩屋委員と有賀委員にご足労いただいている部分であって、4番目はこれからであるのご理解いただければと思う。では、3番目のところの、キャンパスおだわら人材バンク再検討委員会でご議論いただいている内容の経過についてお願いする。

岩屋委員

先ほど報告があったとおりだが、とりあえずベクトル合わせは終わった。次はどうしようかというところで、当然ながら先ほどからも出てきているが、どうしたらよいかと考えていくと、あまりにも情報がなすぎる、なので再度戻るようになるが、現状はどうか、先ほども言ったが、講師の方は何を登録しているのか、本当にこの講師の方が活躍しているのか、そうした時に最終目的が講師と教える側、教えられる側が特にその間での、運営する側、運営する組織というか、管理する部門を限りなく小さくして、自主的に教えた人、教えてほしい人が選べる、選択できるとか、講座を開設できる、もしくは教えてほしい人が講座を企画する、そういうときに講師、どういう講師がいるとか、自主的にできるところを目的にしようと考えたら、いま自

主講座をやってくれる人は限りなく協力してくれるだろう。では、今何も活動していない人たちをどうそういうふうを持って行って、し向けていくのかということらどと思う。そういう部分で今後どんどん分析とか、調べていったり、あるいは限りなく運営する側を小さくしようと思うのであれば、それはそれなりに現状を把握したうえで、可能なかどうかというのを今後検討していく必要があるのかなと。まずは最終目的の部分にいかにか近づけられるかということで、まだまだそこまではいかないが、これからも議論を深めていって、続けていければと思う。ここにあるように、結構な頻度でやっているの、正直言うとこれでも足りないのかなとも思う。運営委員の方は降ろさせていただくが、始めたということもあり、こちらの方に関しては、夕方以降、仕事が終わったあとに参加ができるので、可能な限り引き続き参加させていただきたいと思っている。

委員長 9月まで継続してほしい。よろしくお願ひしたい。手弁当でお二人やったださているということで、感謝する。有賀委員はいかがか。

有賀委員 岩屋委員の方からお話があつたが、人材バンク制度の最終目標、市民主体の生涯学習が実現するための事業の洗い出しを行っている段階である。具体的には、資料6に書かれている必要事項に、つながるような、目指していけるような事業の実施方法について、事業の企画講座からフェスティバルというように、順次検討している。ただ、再検討会議の中で、人材バンクの実態が明確でないという課題が出されて、以前に行ったキャンパス講師のアンケート結果をもとに話し合ひをして、そのアンケートというのが、キャンパス講師のつどい委員の希望調査と、自主講座の実施についてだったが、結果回収率が半分にも満たない状態で、では実際どんな意識を持って登録しているのかといった講師の意識をさらに深く探っていく必要性がでてきた。アンケート結果を出さないような人たちの意識はどうなのかということで、本当に一人一人の自主的を一覧にして、確認できればいいのかなという意見が出された。せつかく100人の登録があるので、その方たちももう少し意識を起こしていく必要性を感じている。まだまだ具体的な事業内容はこれからだが、必要事項を満たしていくような事業の洗い出しとか、実施方法をこれから意見を重ねながら、検討していければと思っている。今月26日に行われるが、キャンパス講師のつどいに、自分も見学させていただく予定で、勉強したいと思う。

委員長 今の話について、ご質問やこの部分はもう少し議論していただきたいということはあるか。人材バンクは、主たる部分は、登録者をどうやって活性化するかということなのか。

岩屋委員 それは一部である。まず、ちゃんとしっかりした講師を作り、次に教える側、教えて欲しい人たちのニーズも把握して、いかにそれを結びつける仕組みを今後作っていくかというのが、最後だと思う。講師をしっかりと育てる、いまでいう企画講座は、先ほどの目標で言うと増やしていくことで可能。でも、それだと自主的に教え合うという環境というのは作れないだろうと。とすると、いかに自分自ら、むしろ企画講座ではなく、自主講座を全員が講師がやっっていけるような環境がまず作れば、教える側の土台ができる。そうするといかに情報発信していったって教えて欲しいなと思っている人たちが、例えば今は相談窓口だとか、情報誌しかないようなところを、例えばだがネットを使ってそこからそういう分野で勉強したいときに、そこから講師にリンクしていったって講師がいると。では、その講師の人でやれないかという情報、さらにそこがけやきの施設等とリンクしていて、そこから施設の予約もできる。私の理想だが、そこまで行けたらいいなというふうには思っている。

委員長 教えるも学ぶも、生きがい作りというのは、よく生涯学習で言われるが、その部分に近い形でどういうふうにしたらセットしやすいかというような運営の具体内容について今案を練っていただいているというような状況である。4まちづくりに生かす人材の育成については、左京委員いかがか。まだ、議論は発展していないかもしれないが。

左京委員 まだ、現状把握だとか、こんなふうに課題を絞り込んでいこうと思っているという報告をいただいている程度で、まだそれについての議論等はこれからの状況である。

委員長 では、次の期の内容になってくるといったことである。この重点項目の進捗状況で、みなさんこんなことをやったという確認でもあるわけだが、これからこういったことを発展させていくという、2期目が3期目にバトンタッチしていくための項目でもある。では、議題についてはこれで終わりにしたいと思う。その他についてはあるか。

有賀委員 チーフコーディネーターだよりを追加で配布させていただいた。このたよりは毎月発行しており、市内の全幼稚園、小中学校に配布している。4月17日にスクールボランティア連絡会というものが開催され、これは各学校にコーディネーターが配置されており、コーディネーターと学校の担当職員が集まり、中学校区ごとに今年度の取り組みについて話し合いをするものである。小田原市には11の中学校区があり、具体的な取り組みを検討するのだが、

例えば白鷗中学校区の具体的な取り組みの中で、キャンパスおだわらの活用といったようなことを掲げられているので、自分時間手帖等を使いながら、スクールボランティアの講師をお願いしたいとか、そういった活用があると思う。当日は、キャンパス講師の紹介をした。自分時間手帖からキャンパス講師だけを抜粋していただき、けやきの職員の方に作成していただいた。これを各学校に配布し、できるだけ活用をお願いした。あと、このキャンパスおだわら情報誌についても、小中学校のコーディネーターにお渡しするように今年の3月くらいからお渡ししている。内容を見ていただいて、講師の活用や親子で参加してもらえるようなイベントも今回できたので、学校の方に活用をお願いするように、これからも働きかけていきたい。

- ・ 次回の運営委員会は平成27年7月1日(水)午後開催予定。近日中に時間と場所を確定し案内を発送する。

以上